

# 琉球大学学術リポジトリ

## 地域ネットワークを活かした保幼小接続の取組み — 沖縄県八重瀬町保幼小連携プロジェクトの成果と 課題 —

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2023-04-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡花, 祈一郎, 国吉, 和美, 長嶺, 久美子, 仲村, 小百合, 永山, 勝幸, 猶原, 和子, 佐藤, 寛子, 塚原, 健太 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24564/0002019707">https://doi.org/10.24564/0002019707</a>

# 地域ネットワークを活かした保幼小接続の取組み

## —沖縄県八重瀬町保幼小連携プロジェクトの成果と課題—

岡花 祈一郎<sup>1</sup>・国吉 和美<sup>2</sup>・長嶺 久美子<sup>3</sup>・仲村 小百合<sup>4</sup>・永山 勝幸<sup>5</sup>  
猶原 和子<sup>6</sup>・佐藤 寛子<sup>7</sup>・塚原 健太<sup>1</sup>

Practice of Efforts for Cooperation between Early Childhood Education and Care  
and Elementary Schools Using Regional Networks  
—The Results and Challenges of the YAESE Town Nursery School, Kindergarten  
and Elementary School Collaborative Project—

Kiichiro OKAHANA<sup>1</sup>・Kazumi KUNIYOSHI<sup>2</sup>・Kumiko NAGAMINE<sup>3</sup>  
Sayuri NAKAMURA<sup>4</sup>・Katsuyuki NAGAYAMA<sup>5</sup>・Kazuko NAOHARA<sup>6</sup>  
Hiroko SATO<sup>7</sup>・Kenta TSUKAHARA<sup>1</sup>

### 1. はじめに

本研究の目的は、地域のネットワークを活かした保幼小接続の取組みの在り方について、沖縄県八重瀬町の保幼小連携プロジェクトを事例にその成果と課題を明らかにすることにある。

保育園・幼稚園・認定こども園等の就学前施設から小学校への接続は、単独の園や学校では進まないのが現状である。秋田・第一日野グループ(2013)では、5年間を通した連携の実践をふまえ、地域のなかで育ち合うコミュニティづくりの重要性が指摘されている。また、例えば、保育園と小学校の接続についての先行事例として、品川区や佐世保市の取組みが挙げられている(保育協会2013)。しかしながら、地域の特性や歴史的な経緯をふまえずに、先進的な取組みをそのまま模倣するだけでは連携や接続はうまくいかないことが多い。

本研究で取りあげる沖縄県においても保幼小接続には独自の文化と特性がある。公立幼稚園が就

学前の5歳児保育を担ってきたことから幼小の接続は進んでいるが、保育園と小学校との接続は十分には進んでいない(岡花・安慶名・名渡山・天願・米須2019)。また、2020年以降、沖縄県内では公立幼稚園の認定こども園化が進んでおり、これまで担ってきた公立幼稚園の役割の見直しが求められていることもある。

以下では、これらの背景をふまえ、八重瀬町保幼小連携プロジェクトについて、教育行政、保育園、幼稚園、小学校の立場から、これまでの経緯とプロジェクトの成果と課題について、その概要を述べていく。続いて、外部の視点から、お茶の水女子大学での幼小連携に取り組んでこられた知見をふまえ、連携・接続について論点を提示する。  
(岡花 祈一郎・塚原 健太)

### 2. 八重瀬町保幼小連携プロジェクトの経緯と概要:教育委員会、保育園、幼稚園、小学校の立場から

<sup>1</sup> 琉球大学教育学部

<sup>2</sup> 八重瀬町教育委員会

<sup>3</sup> 港川保育園

<sup>4</sup> 具志頭幼稚園

<sup>5</sup> 奥間小学校・前東風平小学校

<sup>6</sup> 江戸川大学

<sup>7</sup> お茶の水女子大学附属幼稚園

(1) プロジェクトの経緯と方針について（教育行政の立場から）

プロジェクトの背景

令和3年度（2021年度）、八重瀬町には、18園の法人保育園（4園の小規模保育施設を含む）、4園の公立幼稚園、4校の公立小学校がある。今回、八重瀬町教育委員会を中心に保幼小連携に取り組むまでは様々な課題があった。具体的には以下のような点である。

第一に、小学校とのタテの連携、保育所・幼稚園のヨコの連携、同じ地域で暮らしている子ども同士が顔を合わせる機会が少ないこと。第二に、小学校教育の先取りになっている保育実践が多かったこと。第三に、幼児教育と小学校教育の相互理解が進んでいなかったこと。第四に、幼稚園・小学校は教育委員会が所管し、保育園は児童家庭課が所管するという担当部署が違うという縦割りである。総じて、「近くて遠い」保育園・幼稚園・小学校であった。

その状況を受けて、平成29年度（2017年度）に教育委員会が「八重瀬町保幼小連携」についての研究の取り組みを立ち上げた。その時に、八重瀬町も保幼小連携の中心的な役割を担う者として、保幼小連携コーディネーターが配置された。そこで、筆者（国吉）は30年の幼稚園教諭を経てコーディネーターとして配属され、指導主事と一緒に連携を進めている。

町内の子どもたちが、それぞれの園で過ごした経験を豊かにし、その学びを小学校へつなげ、安心・安全な学びを継続していくための基礎作りを保育園・幼稚園で行うこと、その学びを小学校へつなげ、小学校では、それぞれの学びをどのように受け止め育てていくか具体的に実践方法を模索しているところである。保育者や教師が長年にわたって培ってきた保育観・指導観や実践の在り方を、一度立ち止まり見直しをしているところである。さらに、八重瀬町では令和4年度（2022年度）から公立幼稚園の認定こども園化が進むこともあり課題は多い。

保育観・指導観を共有するための公開保育・公開授業

平成29年に、コーディネーターとして課題に感じたのは、各学校園で接続に関する意識が大きく

異なっていたことである。そこで、まず取り組んだことは、学校園を越えての具体的な子どもの姿を共有することから始めた。互いの違いに気づき、知り合うための公開保育・公開授業を開始し、お互いの保育の実際の内容を振り返ることを継続的に取り組んだ。

平成29年以降、毎年、公立幼稚園、公立小学校、法人保育園がそれぞれ、保育および授業を公開する。そして、子どもの姿を通して対話するのである。このことで、保育者の子どもの捉え方や保育観や教育観が大きく変化してきた。

ただ、当初は、公開保育をするだけで、その姿をもとに議論し対話するということはできなかった。保育園は保育時間の問題から、参加することが難しく、小学校等も授業時間の関係で参加数は少なかった。

さまざまな活動や場所で遊ぶ子どもたちを、どう捉えたらいいのか迷いもあった。そこで、解決策として、保育園、幼稚園では、子どもの姿を記録し、午後の協議会で記録を手がかりに「子どもはどんな学びをしているのだろうか」「どんな気持ちだったんだろう」等グループワークでの対話を継続的に重ねてきた。つまり、公開保育へ至るまでの対話や議論が重要であったと考えている。

子ども観や保育観の違いそれぞれの仲間が、子どもの様子を話し合ったり、指導法について指摘しあったりすることで、自分自身の考えを明確にし、自分とは異なる考えに触れ、新たなことに気づき、園や学校に持ち帰って、自分の保育や授業を見直し実践につなげることができた。各園・各学校で子どもの育ちを共有し、同じ方向を向いて実践にもつながっている。研究を進めていくうえで大きな一歩である。

なお、この際に大きな役割を果たしたのが、現在の「ドキュメンテーション評価」の取り組みにつながってきている。子どもの言葉を記入することによって、子どもの心の動きを読み取ることができた。

少しずつではあるが、校種間を越えて、子どもを中心に話し合うことで、互いが幼児児童理解・学びと指導の在り方を深めるうちに、カリキュラムが繋がっていない現状を踏まえ、小学校へどうつなげるかということで、「八重瀬町保幼小連

携プロジェクト」へと進んできたと感じている。子どもの経験の連続性を重視することは大事だと言葉ではよくわかっていても、「何をつなぐのか」「どうやってつなぐのか」大いに悩むことが多かった。

### 八重瀬町保幼小連携プロジェクト開始

そこで、実践とどう結びついているかを理解し、保幼小で共有することが大切だということで、令和2年度(2020年)、琉球大学の岡花祈一郎先生の研究室に「八重瀬町保幼小連携プロジェクト」に関わっていただきたいとお願いにあがった。この出会いを契機に、「接続」の観点から見直すことになったのである。

プロジェクトを進めるに当たって5つの点に留意して取り組んでいる。

1つ目は、「子ども中心に語り合う」ことの推進である。

2つ目は、組織体制で「プロジェクトチーム」を結成し、保育園・幼稚園・小学校・行政(教育委員会・児童家庭課)とそれぞれの専門性を活かし、どの施設からのニーズに対応できるようになり研修参加者の情報を共有し合う方向に進んでいる。プロジェクト委員がきっかけで行政との距離も縮まっていると感じる。また、プロジェクトは3年計画にし、見直しをもって取り組めるようにしている。

3つ目は、大学と連携をして、エビデンスに基づいた実証的な知見をふまえた連携・接続を実施することである。保育園・幼稚園での生活や遊びの経験が小学校の学びへとどのようにつながっていくのかということについて、自分たちの経験論だけではなく、大学教員と協働しながら進めてきた。

4つ目は、八重瀬町としてのアプローチカリキュラム・スタートカリキュラムの作成の基本的な考え方や作成方法の基本枠を定め、それを基に各園・各学校が柔軟なカリキュラムを作成できるように「八重瀬版アプローチカリキュラム・スタートカリキュラム作成の手引き」を作成した。

令和3年度は、「接続期カリキュラム」を基に、実践を積み重ねているところである(写真1)。

5つ目は、保護者向け「入学前リーフレット」の作成と保護者への配布している(写真2)。就

学する当事者は子どもだけではない。地域の保護者に向けてプロジェクトの成果を発信し、安心して小学校への入学を迎えて欲しいと願っている。



写真1 八重瀬町の接続期実践事例集



写真2 八重瀬町保護者向けリーフレット

### プロジェクト2年間の実践から見えてきたこと

保育園では、保育の見直しができ、子ども理解をもとに、子ども主体の保育が具体化されてきた。保育者主導から対話的な保育へと変化してきたように思う。次の課題は、法人保育園同士のつながり、幼稚園とのヨコのつながりを形成していくことである。

幼稚園では、保育園と小学校とをつなぐ「結節点」(沖縄県2020)となれるよう、保育の充実と更に保幼での子どもの育ちや学びを小学校の接続のあり方等小学校教諭と対話することが増えた。次の課題は、幼稚園が保育園と小学校をつなげるコーディネートの機能を果たしていかなければならない。



小学校では、「生活科」を中心としたスタートカリキュラムの中で、幼児期の遊びや学びを活かした実践を模索しているところである。指導方法や柔軟な時間の考え方、環境の工夫をしている。そのことは、保育園・幼稚園における学びを踏まえて、一人一人が主体的に活動していく子どもの姿につながっている。

これからは、小学校の授業の環境構成に幼児教育の考えを取り入れるなど、共に授業づくりをしていきたいと考えている。大学との連携は、私たちに「つなぐ」ことへの第一歩を踏み出させてくれたと感じている

このような取り組みで、常に子どもを中心とした保育の在り方や指導方法を見直し、保育改善や授業改善を図っている。保幼小の先生方が本音で協議できる関係性が構築でき始めたことは何よりの成果である。

この2年間を振り返ると、子どもを中心に連携を進めるということは、実は「大人同士の交流」につながりになっていることを切に感じている。今後は、年長担任・1年生担任だけでなく、園学校全体での情報を共有し、全体で取り組めるようにすることや地域全体で目指す研修の在り方とともに、研修内容の充実を図っていきたい。

(国吉 和美)

## (2) 福祉と教育の接続：保育園からみた就学はじめに

保育所保育は、児童福祉の中では、「保育に欠ける」<sup>1</sup>子どもたちを保育するといった役割を担ってきた。さらに、近年では「幼児教育」「家庭支援」としての役割も重視されている。八重瀬町の合併前からの歩みを振り返り、子どもの育ちを「生活と遊び」を通して保育してきた保育園と、小学校との接続の中で「子どもを真ん中におく」ために必要だったことを以下で整理する。

### 交流のあゆみ

**平成元年(1989)** 当時の具志頭幼稚園の教頭による「幼稚園が地域のセンター的役割として保育園と幼稚園と学校とをつないでいきたい」とい

う思いからスタートした。そのおかげで2か所の法人園と幼稚園とは学期に1度くらい交流をしたり、授業参観には、年長担任が参加したりと、お互い声を掛け合い交流が続いていた。しかしこれを組織として継続することは出来なかった。

**平成10年(1998)** 自閉症のあるAの父親が、保育園と幼稚園が交流することで、障害理解が広がることや、障害児教育を促進し、持続可能にしていくための体制を作ることを要望し、保育園、幼稚園、教育委員会もその思いに応えようと動き出した。幼稚園交流を定期的に行い、障害児保育実践報告会を教育委員会と合同開催し、村民に広く呼び掛けた。そしてAは、1年生の間は、普通学級に在籍し年度途中から加配がつき皆と同じクラスで学ぶことが出来た。しかしAが卒園し、幼稚園や学校も人が変わると交流が途絶えていった。

**平成20年(2008)** 改訂された保育所保育指針が告示され、保育所児童保育要録作成をきっかけに、児童家庭課、教育委員会、幼稚園教頭が合同で、「学校ではどのように要録が活用されているのか」「どのような情報が必要か」等1年担任へのアンケート調査を行った上で、法人園の5歳児担当者が、要録作成について情報交換や研修を行った。これを契機に、公立保育所を交えた情報共有を行い保幼小連携のシステムへとつなげたいと動き出したのだが、そのシステムを作るには至らなかった。

**平成28年(2016)** 支援の必要な子や配慮の必要な家庭を学校へつなぐ際には、家族形態が不安定なため学習意欲が心配される場合や、明らかになっていないネグレクト家庭など、家庭丸ごとの支援が必要だと感じている保育園と、学校が課題として感じることは、十分につなぐことが出来ていないことがあった。公的責任の下でこれらの問題を支えるシステムが必要だと感じた。そのような状況の中、八重瀬町内の公立保育所が全廃され、公的責任のもと情報をつなぐ役割が曖昧にされ課題が残った。

**平成29年(2017)** 保幼小連携における情報交換会では、遊びや活動を中心とした幼児教育と、

<sup>1</sup> これまで「保育に欠ける」子どもと呼ばれていた事由は、2015年の子ども子育て支援新制度移行に伴い、対象が拡大され「保育を必要とする」場合において市町村が認定することになっている。児童福祉法第24条および児童福祉法施行令27条を参照のこと。

学習規律の中で学びと社会性を育成する小学校教育とのギャップがあった。

例えば「おじぎの仕方」や「ひらがなの書き順」「上履きに慣れさせて」といった「こんな1年生を育ててください」等の要望が多くあり、子ども主体の活動を通して得た知識や技能、そして非認知能力を、どのように小学校の学習規律を伴った主体的な学びへと接続していくのかを話し合うことはなかった。

### 保育園の変化

八重瀬町保幼小プロジェクト開始により、法人園はそれぞれの園の方針や園の理念のもと保育者の援助方法や、「大人がやること」や「大人が出来る」環境づくりに重点がおかれていた。子どもは、どのような願いを保育者とすり合わせ、対話しているのかが、聞き取れていないように感じた。一方で、幼稚園は公立全園で公開保育と合同研修会を重ね、町内全ての幼稚園教諭が「環境を通じた保育や記録」「ドキュメンテーションの共有」といった幼児理解のために実践を語り合い深めあっていた。

そのような幼稚園の学びから、保育園も「子どもにとってどうなのか」という視点へと変わり始めた。その後の公開保育に取り組んだ園が、ドキュメンテーションを通して対話していくうちに保育者自身の保育観にも変化が表れていた。

保育園のアプローチカリキュラムの作成の際は、0歳からの体験の積み重ねの大切さを各園が再認識しながら、八重瀬町の幼児教育の方向性を確認出来たように思う。

令和3年度(2021年度)の実践事例集に小規模保育施設の4事例が加わり、八重瀬全体で、公私立を問わず0歳からの子ども理解が進んだように感じた。

### 小学校の変化

東風平小学校の授業参観(2020年)では、5月の学校体験で連日取り組んだ「気づき」「発見」「疑問」などが文字化され、時系列にその変化が見えるように教材が工夫されていた。発表したり共有したりと、教師が生徒に決定をゆだねる活動と子ども同士の関わり合いから対話を発展させている場面が多く見られた。5年担当教諭にも「そちらに探検行くからよろしくね」とスタートカリキュラム

を教師間で連携しあいながら進める授業は私がイメージする小学校とは違い大きく変化していた。

また、具志頭小学校の公開授業(2021年)では、当園の卒園児たちが7月という時期に算数の「のこりはいくつちがいはいくつ」という単元に取り組んでいた。なかなか答えが見つからない時も、隣の友達同士で教え合い、担任も一人一人の進捗を読みながら声をかけている。わからないことを聞き合える安心感で、問題に真剣に向き合うことが出来ていた。この姿を見た当園の5歳児担任は、「一人の遊びを複数人の遊びにつなげながら探求していく5歳児の姿と重なった。機械的に出来ることではなく理解することの違いをこの公開授業を通して学んだ」と語っていた。授業の最後に卒園児が「頑張った」と両手をあげて満足そうな笑顔を見せた。1年生としての自己肯定感や自己有用感が感じられた授業であった。

### おわりに

保幼小接続の中で、子どもを真ん中におくために必要だったことは、子どもの思いや願いからスタートすることだと時間をかけてたどり着いた。子どもも大人も、たくさんの問いと向き合っている。保育者も教師も生き生きと違う感じ方、違う世界を受け入れようとしている。これからも「子どもを真ん中において」対話し、子どもが活きる持続可能な接続に向けて連携していきたい。

(長嶺 久美子)

### (3) 公立幼稚園の役割と小学校への就学

八重瀬町には、東風平地区に東風平幼稚園と白川幼稚園の2園、具志頭地区に新城幼稚園と具志頭幼稚園の2園、合計4つの公立幼稚園がある。いずれも4歳と5歳の2年保育を行っており、園長は小学校の校長先生が兼務している。1園は小学校と敷地が異なるが、3園は小学校と隣接しており小学校の様子を感じる沖縄型の幼稚園である。令和4年度(2022年度)に1園が認定こども園に移行予定である。

平成29年(2017年)、町内の子ども達がどの幼児施設で幼児期を過ごしても安心・安全に小学校へ学びがつながることができるように保幼小連携の取り組みが開始された。その2年後に、八重瀬町保幼小連携プロジェクトとして取り組みが移行し

ていった。これまでの実践の中で学んだことを振り返り整理していきたい。

これまで、子どもの遊びや生活する姿から何を経験しているのか、何が育っているのか、幼児理解について園内或いは、町内4幼稚園で研修を行ってきた。保幼小連携が始まり、積極的に公開保育を取り入れて幼児の姿を捉え、幼児の思いを理解する話し合いが繰り返され、幼児理解に基づいた保育の在り方、子ども観、保育観を共有することができた。同時に小学校の先生方も参加し、公開保育と近隣の園との交流による学び合いも充実してきた。

これまでの学びを私達が、小学校へどうつなぐかということで、令和2年度(2020年度)八重瀬町保幼小連携プロジェクト事業が開始された。

プロジェクト前の小学校との連携は、「1年生のお招き会」「小学生による読み聞かせ」等、幼児と児童の交流が主だったが、研修や講話を通して教師と保育者が更に互いの教育内容や方法を知り、発達の連続性の視点から、幼児期から児童期へのつながりを考えていくことの重要性にシフトしていったように思う。

本プロジェクトは、保育園と幼稚園の保育参観、小学校の授業参観から互いの教育内容や指導方法を知ることから始まった。令和3年(2021年)7月の具志頭小学校1年生の授業参観では、課題を個々で考えて次に友達と話し合い、その後自分の考えを見直したりする場と時間が設けられ、子ども達が主体的に学び合う雰囲気を感じられた(写真3)。



写真3 具志頭小学校1年生での授業参観

同様の姿が幼稚園でも見られることがある。子どもが心動かされた遊びを繰り返す中で課題を見つけ、時には友達と考え、試行錯誤しながら解決に向かう姿と重ねてみる事ができた。小学校においても幼稚園においても、受け止める、共感する、賞賛する、励ます、提案する等、子どもの主体的な学びを促す指導・支援方法があり、共通する場面が多々見られた。

保育園の公開保育では、4歳、5歳児の子どもが、0歳から3歳の学び育ちの積み重ねた姿であることがわかり、環境や資料からも発達の連続性を垣間見ることができた。

その後、保育参観と授業参観の振り返りやドキュメンテーション評価を取り入れた協議を行った。振り返りでは、子ども達がリレーをするための白線を自分達で引いていたことに驚いた小学校の先生の話や、自分達でトラブルを解決しようとしていた場面が見られたと幼稚園、保育園の先生のコメントがあった。小学校の授業参観では、友達にわからないところを優しく教えていた子がいた等、互いの保育や授業を見合うことで、幼児・児童理解をするには、程よい距離間をとって見守り、支援することのよさに気付くことができた。

ドキュメンテーション評価では、写真やコメントから子どもの楽しんでいる姿や困っている姿から、何を感じているのか等の子ども理解につながっていった(写真4)。また、各園どのくらいのペースで作成しているのか、だれで作成しているのか等、情報交換の場にもなっていた。このように、振り返りやドキュメンテーションを基に保



写真4 八重瀬町の保幼小の教員と学生らがドキュメンテーションをもとに語りあう様子



育者と教師が話し合い子どもを多面的にみることで、子どもの内面に着目した共通の視点で省みることができたと考える。

同時に、話を聴く、気持ちを伝える、自己調整等の幼児期の学びが小学校の学びの基礎になっていることを感じた。

具志頭幼稚園でもドキュメンテーションを掲示している。写真を基に教師は、保育の振り返りや次の保育の参考にしている。子どもは、自分自身の振り返りや友達と写真を中心に話合うことで体験の共有やつながりが深まる様子が見られた。保護者は、園生活を知り遊びの中の学びに理解を示しているといえる。これまで育った力が、小学校の生活と学習にどうつながりがあるのか、保護者へ伝えていくことが重要だと感じた。

現在本園では、子どもの姿に照らしてアプローチカリキュラムの検証を行っている段階である。これから、保幼小の先生と一緒にスタートカリキュラムとのつながりを深めていきたいと考えている。幼稚園では、子どもの学び育った力を3つの資質・能力と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」をツールに、小学校生活に活かしていけるよう小学校の先生方へ丁寧に伝える役割があることを実感した。保育においては、発達に応じた意図的・計画的環境構成に努め、子どもが主体的に取り組む遊びや生活を大切にしていける保育を日々重ねていくことが肝要と考える。

教師は、保護者と共に子どもの育ちに寄り添い、時には悩み、時には喜びを共有し関わってきた。今後も家庭、保育園、小学校、地域がつながり子ども達の健やかな成長を願う子どもの学び育ちを支えていきたいと考えている。

(仲村 小百合)

(4) 『安心・安全・最優先』子どもと共に創るみんなが楽しい小学校：自己選択・自己決定を子どもに委ねるスタートカリキュラムの充実を通して

東風平小学校スタートカリキュラムの実践について

【4月1週目】靴箱、ロッカー、机の自己選択・自己決定

東風平小スタートカリキュラム（以下、本文では「東風平スタカリ」と表記する）の導入として、

子ども達が自分で靴箱やロッカー、机を自己選択・自己決定する機会を設定した。子ども達は自分で決めたことに責任をもち、小学校は、自分で決めることができる場所だということが実感を伴って理解できると考えた。まだ、名前が書けない子どもがいることから、保育園や幼稚園で遊び、慣れ親しんできた折り紙で、好きなものを作って自分の所に貼り付け、目印とした。この時間は、学活と図工科の合科的・関連的な指導として授業を行った。

【4月2～3週目】教室飾りつけと机の配置の自己選択・自己決定

教室を自分達で飾り付けることによって、安心できる居場所として、自分達で過ごしやすい教室を創っていくという経験ができると考えた。子ども達は、折り紙で飾りを作り、自分を変えたいところを見つけて、楽しみながら、飾りつけをしていた。教室だけでなくベランダの飾りつけもたのしみ、教室やベランダを自分達で変えていく姿が見られた。

4月1週目に感じたこととして、オープンスペースの床にごろごろと転がったり、寝転んで本を読んだりする子ども達の姿がよく見られた。オープンスペースには、読書コーナーを設けていたため、その付近で遊んだり、自由に読書をしたる子どもが多かった。子ども達に問かけると、「図書館にある畳の部屋をつくりたい」という思いや願いが出てきたので、朝の時間にお世話係の6年生と協力しながら、自分たちの畳スペースをつくった。その結果、安全面も確保されると同時に、多くの子ども達が利用する居心地の良い安心できる人気スペースになった。

教室の座席の位置も子ども達に自己選択・自己決定を委ねた。最初は、番号順に並んでいたが、どこでも好きなところを選べるようにした。その結果、4名の子どもが黒板に背を向ける結果となったが、スタートカリキュラムとして、安心感をもち、生き生きと自己発揮できることを最優先し、できるだけ黒板を使わずに授業を進めた。

上記の実践によって、「みんなが過ごしやすい教室」はみんなで協力して創っていけることを実感したと考える。また、自分たちの思いや願いから、教室を変えられるという経験をすることで、



「自分ごと」として教室をよりよい環境にしようと行動する子ども達が増えた。

【4月3～4週目】子どもの思いや願いを実現するわくわく学校探検

学校を探検する活動を通して、学校での生活は様々な人や施設と関わっていることや一緒に生活するたのしさが分かり、生活上必要な習慣や技能を身に付け、楽しく安心して学校生活ができるようにすることが目的である。

東風平小スタカリでは、より子ども達の「行きたい」という思いや願いをできるだけ実現したいと考えた。そこで、2年生の生活科の単元「1年生をお世話しよう」と関連して、1年生と2年生がペアになって、一人1台のカメラを手に、1年生は、「自分だけの学校のわくわく・どきどき探検し隊」、2年生は、「1年生のわくわく探検をサポートし隊」として学校探検の授業実践を行った。このような環境を仕組むことにより、子ども達の安全面を担保しながら、より一人一人の思いや願いから学びをスタートし、わくわくする活動になると考えた。活動を終えた後、子ども達は、写真をパソコン室で一人ひとり自己選択・自己決定した。

その後、単元のゴールとして設定した「学校のわくわく・どきどきをお家の人に教える」ために、自分で決めた写真をもとに、お家の人に説明する活動を設定した。

子ども達は、このような活動を通して、「学校ってなんてたのしいところなんだ」とわくわくしたり、いろいろな人と関わり「安心感」を感じたりできたと考える。

さらに、自己選択・自己決定の機会を設定し、子ども達の思いや願いから学びをスタートすることにより、主体的に自己の良さを発揮し、楽しい学校生活をつくり出すカリキュラムを実現できたと考える。

【5月～6月】学校探検や特別活動から教科の学びへ

学校探検で見つけたひらがなや花の数、一輪車の台数等を国語や算数の時間で教材として活用し、教科横断的な学習を進めていった。学校探検で花の写真を見つけた際、子ども達の「花の数を数えてみたい」という思いから、算数の「なかも

づくりとかず」の導入につなげていった。子ども達は、意欲的に生活科の経験と机上の学びを繋げながら、楽しく学習することができていた。

また、掃除時間に教室掃除とオープンスペース、靴箱で使えるほうきの数をめぐってトラブルが起こった。そこで、算数の時間にはおはじきやブロックを使い、ほうきの本数と掃除場所の人数を対応させながら、トラブルを解決することができた。

#### 成果と課題

成果として、スタートカリキュラムを通して、子どもの思いや願いを大事にしてきたことで、子ども達が安心できる居場所作りに繋げることができた。また、幼稚園や保育園で体験してきたことを活用・発揮できる場を設けることで子ども達の活躍の場を多く作ることができた。子ども達の安心・安全を最優先にし、子ども達の思いや願いから学びをスタートすることによって、多くの子ども達が「明日も学校に行きたい」と思えるような、スタートカリキュラムを実践できたと考える。

課題としては、小学校1年生として、最低限どんな力を身に付けさせるべきか、指導要領のミニマム化を図り、教科書の内容の精選した上で、スタートカリキュラムの充実を図り、各教科を進める必要があった。また、周りの子たちの安心感のためにも、4月の段階である程度の学習規律を身に付けることは必要ではないかと葛藤があった。1年を通して、自由と放任のバランスをとることが難しかった。子ども達と担任でみんなが安心できるような学級づくりに向けたルールメイキングができると良かった。「これがルールです。こうしないといけません。守らないといけません。」と上から押さえつけるのではなく、エラーが出てきて一緒に考え、みんなで話し合う場が必要であった。そのためにも、話を聴くことのできる1年生を育てることも重視し、スタートカリキュラムを進めていく必要があった。

(永山 勝幸)

### 3. 八重瀬町の取り組みへのコメント

#### (1) 小学校教育の立場から

筆者は小学校で35年間教員を務め、現在は大学で保育者養成にあたっている。お茶の水女子大学附属小学校（以下、附属小）における附属幼稚園

との連携に携わった経験を踏まえ、八重瀬町の取組みにコメントしたい。

### お茶の水女子大学附属での幼小連携

お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校の接続は、1881（明治14）年、当時の附属幼稚園監事であった小西信八が「つなぎ組」を設けて附属小学校との接続を図ろうとしたことを端緒に（湯川2002）、現在まで展開してきた。筆者が初めて関わった1989（平成元）年からの小中連携では、3・3・3制を採用し、小学校1年生はことば・数・総合の3つの領域で学習を進めた。2001年から幼小連携研究を行い、小学校の教科を学習分野にした。新たに設定した「接続期」の学習分野はことば・かずと形、創造活動の3つであった。2005年からの幼小中連携は、異なる背景を抱えた私たち教師が授業研究を進める中で、自らを省察する身体を育てる研究でもあった（お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校ほか2008）。小学校教育を下ろすのではなくボトムアップを大事にしたが、ここでは、わかり合えないということはこういうことだと痛感しながらも異なる校園の先生と連携を進めた。2011年には、シチズンシップを意識した新たな接続期を考え、個別・協同・プロジェクトという3つの柱のもとに、接続期を1年生の12月まで長く取った（お茶の水女子大学附属小学校ほか2014）。そうした取組みの中で、接続期を変えると、その後の教育が変わることを経験した。まずは低学年教育を見直すことにつながり、そこで大事にしたサークル対話が6年生までつながることで、「てつがく科」をつくることに発展した（お茶の水女子大学附属小学校ほか2019）。

附属小では、学年協力担任制と教科担任制を敷いている。前者は学級王国にならずに、異なる大人たちがともに一緒の子どもたちを見つめることで視野が広がることを意図している。後者は、現在第3学年以上に採用しており、専門性をもった教師が、子どもたちの何気ない言動やそこにある本質的な問いに気づくことにより、探究の途をつないでいくことを意図している。そのため教室は常にオープンで、誰が入ってもいい、どんな教師が座っていても構わないという文化が根付いている。こうした背景のもとに幼小連携を推進している。

八重瀬町では保幼小の先生方が、互いに真摯に耳を傾けている様子が看取されたが、附属において連携を開始した当初は、それぞれの校種の文化こそが正しいという考えのもと、互いに同感を求めてしまっていた。筆者も幼稚園の文化に驚き、「生活」という言葉一つとっても、随分使われ方が違うなど疑問だらけであった。小学校では、到達目標に向かって子どもの変容を捉えようとする視点が強いので、目の前の子どもが何をやりたいと思っているのか、それがどのような身体的な動きにつながるのか、何に興味を示すのか、といったところから出発しようとなるまでには非常に多くの葛藤があった。

### 小学校における連携をどう考えるか

永山先生は、これまで高学年を受け持つことが多かったと聞いているが、小学校は担当する学年が固定化されがちである。それにより、高学年の経験が多い先生にとっては、子どもたちが慮って教師の期待に応えるような発言や行動をとってくれることが当たり前になってしまう。ところが1年生は、不安を抱えて幼稚園等から来て、どうして？何？といっぱい質問したり、整然とできなかつたりする。附属小でも、このぐちゃぐちゃに見えることが我慢できるかが、連携の大きな課題であった。子どもの側から世界を覗いてみて、子どもたちがやりたいことを大事にして環境構成を変えてみたのだが、これでは子どもに節操がないと我慢できない先生もいた。教師の意を汲んで動くことや、教室では静かに先生の方を向かせるという発想を止めようとしたとき、喧々諤々となったことを覚えている。

だから今回の永山先生の取組みがどんなに大変なことだったかと察する。おそらく永山先生が一番苦労されたのが、「待つ」ことだったのではないか。子どもたちの様子がぐちゃぐちゃに見えても、その中できらっと光るもの、子どもたちが向かっているもの、つぶやきなどに心を寄せるようになったときに、教師としての大きな壁を乗り越えることができるのではないだろうか。筆者も子どもの側から世界を覗こうとする幼稚園の先生方の姿に感銘を受け、自らを問い直した経験がある。何か変なことをしていたり、何かつまらなそうにして後ろに下がっていたりする子どもがいて

も、後ろの方からはどんなものが見えるのだろうと捉えられるようになった。

それから、筆者も選択肢を増やすことを中心とした授業を展開してきたが、選択したり決定したりした経験が少ない子にとって、それは非常にハードルが高いことだと思っている。保幼小連携の一環として、選ぶことの面白さや喜びを幼児期からどのように経験し、つながるのかを考えてみるとよいのではないかと。また、選ぶことには常に責任が伴うことも、幼児期から少しずつ感じられるようにしていく必要があるだろう。

今後に向けて考えたいこと

子どもたちが「聴く」「聴きあう」とはどういうことなのかについて、保幼小接続で経験されたことをもとに、先生方とともに考えていきたい。幼稚園や小学校では聴くための姿勢を保つための指導が行われることがままあるが、果たしてそれが大事なのだろうか。一番後ろに座っていても、這いずり回っていても、その子がすごくよく聴いているということがある。逆に、いい姿勢をしていても何も聴いていない、きれいにノートを取っていても考えていない子どももいる。

保幼小連携の前提として、校種や学校はもちろんのこと、教師や子ども一人ひとりが異なるという認識を据えてみてはどうかと思う。八重瀬町の先生方はよく話し合っている。それを承知であえていうなら、対話は分かり合えないことからだという。分かりたいと思うことは大事だが、同感する必然性はなく、異なりを大切にすることもいいのではないだろうか。

(猶原 和子)

## (2) 保育の立場から

筆者は、お茶の水女子大学附属幼稚園（以下、附属園）に勤めており、幼小接続にも携わってきた。そこで保育の立場から、今後に向けて考えていきたいことを中心にコメントしたい。

### 地に足が着いた保幼小連携

附属小・園の幼小接続と大きく違うところは、町内でつながりをもって子どもたちを育てていく、地域に根差した実践であることだ。長嶺先生のご報告にあったように、障がいのある子どもたちから接続やつながりを考えたことが起点の一つであるというのは、国の要請もあって取り組んだ

附属での実践とは異なる。こうした地域における取り組みにおいて、コーディネーターの国吉先生の存在が大きいのではないかと感じた。子どもたちにとっての保幼小連携という観点から、幼稚園、保育園、小学校に対して中立の立場で問題提起をされてきたことが、八重瀬町の取り組みを支えているのだろう。また、様々な現場の教員からすると、大学の研究者の視点が入ることでの魅力は大きい。現場だけではできない、つながりができてくることがあるのではないかと感じた。

### 保育と小学校教育の言葉と文化

筆者は、附属小の先生方と交流するようになって、保育の世界で使っている言葉が、保育の世界の中だけしか通用しないことを痛感した。連携を続けていくうちに、小学校でしか使っていない言葉もあるのではないかと気づくことがあり、言葉の意味をきちんと捉えていくことが必要なのではないかと、感じている。例えば、永山先生が「自己選択」「自己決定」という四字熟語を資料の中で、何度も使っておられたが、そのたびに、自分ですべてやらねばならない苦しさのようなものを感じ身につまされる感覚もあった。実践の様子を伺ったら全くそうではないことがわかり、興味深く思った。子どもたちが座席の位置を選んだときに黒板を背にして机を並べたエピソードが紹介されたが、子どもの自然な動きであり、「自己選択」という言葉をあえて使わなくても、見られる姿であると感じた。

### 目の前の子どもたちを面白がる感性

このような子どもたちの何気ない行動は、小学校の文化を覆していく力になるのではないかと考えられるが、永山先生には、そうしたぐちゃぐちゃした子どもたちの言動に柔軟に対応する耐性があるのではないかと感じた。これが永山先生に限ったことなのか、沖縄の先生たちに広く共有されているものなのかは興味深い。子どもたちを待ったり、それに耐えたりすることに悩みながら実践を重ねられてきたとお話があったが、悩みつつも、豊かな実践を積み重ねていっている基盤にあるのは、目の前の子どもたちのことを面白がる先生の感性であろう。教師が面白がっていることを子どもたちも感じて、やってもいいんだと思ったり、自分たちでも面白いと思ったりすることにより、

興味が広がっていくことは大事であろう。

子どもは関係性の中で育つ

実践の報告を伺い、子どもが関係性の中で育つことを再認識した。子どもたち同士の関係、教師との関係、保護者との関係、教師と保護者との関係など、様々な関係の中で、子どもは育っている。

そう考えると、「自立」ということを丁寧に考えなくてはならない。自立というと、自分ひとりでできるようになることと考えがちだが、困っているときに誰かに助けを求められることの方が、本当の意味で自立していると言えるのではないか。附属園では「10の姿」や「3つの資質・能力」を吟味する手始めとして、自立について考えている。これまでは、筆者自身も保護者も、小学校に向けて一人ですることができる準備が必要なのではないかと考えてきたが、「自立」という言葉を教師がどう理解し、それを子どもや保護者にどう投げかけるのが課題なのではないかと感じている。

教師の身体性

附属での幼小連携研究で一緒にした猶原先生はひとたび子どもたちの中に入ると、子どもたちの中に溶け込んでいくようで、幼稚園の教師と共通するところがあると感じている。幼稚園の子どもたちが普通に遊んでいるところに、小学生が獅子舞とお囃子をしながら園庭に入り込んでくるという交流をしたことがあるが（本実践事例については、日本音楽の教育と研究をつなぐ会2019を参照）、そこでも大人の存在が目立たぬようにすることなど、教師のかかわりのありように拘った。このように保幼小接続を考える際には、教師の身体性が重要であろう。教師がどのように子どもを眼差していくか、どのような位置に立つか、どのように距離をとるのかを考える必要があり、それは子どもの発達や身体に合わせて変容していくものだと思う。この点は筆者としても発信していきたいことであり、沖縄の先生方とぜひ一緒に研究していきたい。

それぞれの文化で大事にしたいこと

保育園、幼稚園、小学校、それぞれがやはりこれは大事で譲れないと思っていることを伺ってみたい。例えば、小学校の先生は、幼稚園に合わせて実践を変えてきたが、やはり小学校教育の肝はこれだとか、小学校の教師として子どもとの関わり

りの中で譲れない大事な部分がどこなのかなど、お互いに語り合えないだろうか。それにより、各々の園・学校における文化の共通点や相違点などが改めて浮き彫りになり、より深い次元での接続につながることを期待される。

(佐藤 寛子)

#### 4. おわりに

本稿では、八重瀬町保幼小連携プロジェクトについて、保幼小教育委員会の取組をまとめ、お茶の水女子大学附属幼小連携に関わった経験のある猶原先生と佐藤先生のコメントを整理してきた。以下では、八重瀬町保幼小連携プロジェクトの特質を挙げつつ、その成果と課題を論じたい。

第一に、八重瀬町では、地域の学校園が連携しながら同じ方向を向き子どもの就学を支援する体制づくりができていた。保幼小接続は、ひとつの園、一人の教師の努力では動かないことがほとんどである。八重瀬町は教育行政がイニシアティブをとりつつ幼保、公立私立の壁を越えヨコのつながり、そして、小学校へのタテのつながりを意識した取組みとなっていた。保幼小の保育者・教員が対話する場、研修の機会の確保、そのための予算・人材の確保など、つながるためにはその土台が不可欠である。八重瀬町は教育委員会をはじめ福祉部局も含めその連携体制が比較的上手く機能していると言える。

第二に、このプロジェクトは、育ちと学びをより良く接続することを目的としながらも、保育者と小学校教諭が対話を通して、自らの大切にしていることを意識化する営みでもあったということである。八重瀬町では、保育者も教師も公開授業・保育の後にドキュメンテーションを作成して議論する場を設けている。そのなかで、保育者は子どもの興味関心や思いに着目したドキュメンテーションを作成し、小学校の教師は保育者の支援や指導性に着目したドキュメンテーションを作成する傾向がみられた。それは、保幼小で何を大切にしているのか、そして、それぞれの「譲れないと思っていること」（佐藤先生）につながると考えられる。猶原先生が「生活」という言葉ひとつとっても使われ方が違うことに驚いたように、そして、佐藤先生が「自己選択」「自己決定」という言葉



を使わなくても、保育の中で当たり前に行われていると述べたように言葉とその概念のありようは大きく異なっている。そこには、就学前と就学後の子どもの育ち以上に、保育者・教師の暗黙知や価値体系が影響していると考えられる。

第三に、このプロジェクトは、どちらか一方にあわせる連携ではなく、目の前の子どもの姿を共有することから対話することを目指したものであった。そのため子どもの姿を共有することを強調した。具体的には、公開保育、公開授業のなかでの、子どもの姿を共に参観し、共にドキュメンテーションを作成し対話した。この方針にした理由は、ともすれば、保幼小接続の議論が、保育者の都合や小学校側の都合、さらには保護者の要望などに左右され、当事者である子ども自身の姿が見過ごされることになりかねないからである。子ども自身は小学一年生になることをどう感じているのか、どのようなことに興味があり、どのようなことを学びたいと思っているのかという点に、保育者も教師も気づき、そこから今この時期にどのようなことがねらい・目標とされ、支援が必要なのかを組み立てるという発想をとった。このような発想は、子どもの経験からボトムアップ的に接続期のカリキュラムを構想する第一歩だと考えられる。

とはいえ、3年目を迎える八重瀬町保幼小連携プロジェクトにはまだ課題も多い。

第一に、新年度に小学校1年生の担任が替わることによって、保幼小接続に関する考え方やスタートカリキュラムの実践が伝わらず、一からカリキュラムづくりや実践に取り組むことになり、保育園・幼稚園との対話もゼロから構築し直さなければならぬことが多いという点である。これを改善するためには、八重瀬町内での取組を小学校内全体で共有したり、スタートカリキュラムやその実践を他の学年の教師に見てもらったりするなど、校内全体での組織的な取組が重要となるだろう。

第二に、子どもを真ん中に置くという意味が、徐々に、子どもが早く小学校を理解し、適応し、学習できることに変質する懸念がある。これを払拭するためには、常に何のための保幼小接続なのか、何のためのスタートカリキュラムなのかを確

認し続けることが必要ではないだろうか。幼児期の遊びの中における主体的な学びとそれによる育ちを基に、小学校6年間、そして生涯にわたる主体的な学びの基礎をつくることが保幼小接続の肝であると言っても過言ではない。子どもたちは乳幼児期を経て培ってきた自ら学ぶ力を信じ待つこと、そしてそれを伸ばすために子どもたち自らが選択したり、興味関心を追求したりできる機会をつくっていくことの重要性を本稿で取り上げた実践事例や、お二人のコメントから再確認したい。

これらの問題はプロジェクトを継続すればこそみえてきた課題でもある。今後、関係者のなかで継続するための工夫や理念や考え方を広げる取組みも進めていきたい。

(岡花 祈一郎・塚原 健太)

## 引用参考文献

- 秋田喜代美・第一日野グループ (2013) 『保幼小連携—育ちあうコミュニティづくりの挑戦—』ぎょうせい。
- 日本保育協会 (2013) 「保幼小連携に関する調査研究報告書—保小の連携から家庭・地域社会との連携へ—」社会福祉法人 日本保育協会。
- 神里博武 (2000) 「沖縄の5歳児保育問題—その形成過程と取り組みの経緯—」『幼児の教育』日本幼稚園協会, (99) 12, 37-43.
- 国立教育政策研究所 (2017) 「幼小接続期の育ち・学びと幼児教育の質に関する研究〈報告書〉」[https://www.nier.go.jp/05\\_kenkyu\\_seika/pdf\\_seika/h28a/syocyu-5-1\\_a.pdf](https://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf_seika/h28a/syocyu-5-1_a.pdf) (2019.04.29 閲覧)
- 岡花祈一郎・安慶名名奈・名渡山よし乃・天願順優・米須清貴 (2019) 「沖縄県における保幼小接続に関する現状と課題」『琉球大学教育学部紀要』95, 87-93.
- 沖縄県 (2020) 「黄金っ子応援プラン (第2期沖縄県子ども・子育て支援事業支援計画)」沖縄県。
- 文部科学省 (2017) 『小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説・生活編』東洋館出版社。
- 湯川嘉津美 (2002) 「小西信八の幼稚園観」『日本保育学会大会発表論文集』(55), 192-193.
- お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校・中学校・

子ども発達教育研究センター（2008）『「接続期」をつくる—幼・小・中をつなぐ教師と子どもの協働—』東洋館出版社.

お茶の水女子大学附属小学校・NPO法人お茶の水児童教育研究会編著（2014）『交響して学ぶ—学習分野と創造活動でつくる学び—』東洋館出版社.

お茶の水女子大学附属小学校・NPO法人お茶の水児童教育研究会編著（2019）『新教科「てがつく」の挑戦—“考え議論する” 道德教育への提言—』東洋館出版社.

日本音楽の教育と研究をつなぐ会編著（2019）『唱歌で学ぶ日本音楽』音楽之友社.

## 付記

本研究は、令和3年度琉球大学教育学部地域連携部会成果報告交流会「八重瀬町保幼小連携プロジェクト：子どもを真ん中においた接続の在り方」（2022年3月5日オンライン開催）にて報告された内容と議論をもとに加筆修正したものである。

本研究の一部は、JSPS科研費21H00846, 22H00990の助成を受けた。